



第2回(上海)国際東方薬膳食療学術シンポジウム並びに 第1回「東方食療与保健」雑誌編集委員会の開催報告

2004年第2回国際東方薬膳食療学術シンポジウム及び第1回「東方食療と保健」雑誌編集委員会が8月9日～13日の間、上海で開かれた。今回は、2002年の香港大会に引き続き、2年ぶりに国際東方薬膳食療学会(香港)と上海薬膳協会の共催として行われた。

この2年間、中医学には大きな挑戦があった。SARSが蔓延したことに対し、中医学の優れた治療効果、中西医结合によって死亡率の減少などの成績を挙げ、世の中では改めて中医学を注視するようになった。その一方、飲食生活が病気の発生と変化に大きく影響することも人々が注目するようになった。そこで薬膳が以前にないほど重要視され始め、進展してきている。

開幕式で、湖南中医薬研究院院長蔡光先教授はこの2年間の中医薬事業の進歩と発展について述べ、今後の研究と発展について、個人的あるいは小規模の範囲では、成功する可能性は少なく、成功する条件として各分野、各国の専門家間の交流と協力が必要であり、そうすればさらに薬膳が発展していくことができると述べた。

上海中医薬大学巖世藝学長も大会でお祝いの言葉を述べた。



上海中医薬大学を訪問、陳徳興教授と

日本からも本草薬膳学院顧問鷲見美智子氏が薬膳の角度から日本料理を分析し、特に刺身料理について、季節感、包丁さばき、盛付けを大切しながら薬味も重視すると述べた。例えば、紫蘇、わさび、生姜を必ず刺身と一緒に出していることは中医薬の配合七情に相応している。また、同学院の副学院長勝本海詠氏も中西医结合の穀菜膳を紹介した。

国際東方薬膳食療学会(香港)の陳抗生会長(香港)及び譚興貴会長(湖南)が今回の大会で、この十数年来の中医薬膳分野での経験をまとめ、この分野で貢献した各学者、研究者、教育者の努力を高く評価し、「国際薬膳食療大師」と「国際高級薬膳食療師」の荣誉证书(称号)を贈ることを決めた。

「国際薬膳食療大師」には南京中医薬大学学長項平教授をはじめ、翁維健(北京中医薬大学)、孟仲法(上海薬膳協会会長)、叶錦先(福建中医学院)、竇国祥(東南大学)、王者悦(長春中医学院)の6名が選ばれた。また、日本の難波恒雄(故人)氏が中薬・薬膳分野に於いて何十年もの歳月をかけ、研究・教育したことを高く評価され、「国際薬膳食療大師」の称号を特別に贈られることとなった。

「国際高級薬膳食療師」には彭銘泉(四川)を始め38名に贈られ、日本では本校学院長の辰巳洋と富山薬膳研究会の会長大島正文氏が選ばれた。

最後に、中国、香港、マカオ、日本、韓国など約200名の参加者がこれから国際舞台でお互いに交流と協力を努め、共に中医薬・薬膳食療における輝かしい明日を築きあげていくと誓った。



このたび、中国中医薬大学の先生方が本校の

顧問	譚興貴	湖南中医学院教授	高等中医薬院校教材「中医薬膳学」主編
	馬永華	南京中医薬大学教授	南京自然医学会会長
客員教授	謝英彪	南京中医薬大学教授	
	盧長慶	北京中医薬大学教授	

となりました。